



じゃあすき あけぼの



福山市立曙小学校 校長だより 2026年(令和8年)5月26日

「学び(授業づくり)」の研修の中で、先生方に尋ねたことがあります。

「小・中学校時代の得意(好き)な教科と苦手(嫌い)な教科は何でしたか？また、その理由は何ですか？」

それぞれの答えをいただきました。

得意(好き)な教科には、さまざまなものが挙がりましたが、理由として、「分かった」「できた」というものが多く、「考えることに没頭できた」「躓いても何とかしたかった」というものも見られ、結果と意欲に係わることが大抵の理由でした。中には、「担当の先生が楽しかった」というものもありました。

一方、苦手(嫌い)な教科について挙げられた理由は、多くの **具体的なもの** が挙げられました。次のようなものでした。

- 整数、分数、小数を習ったが、数直線上に表すまで、数の大小が分からなかった。
- 何かが10個一列に並んでいると、1と2の間、2と3の間…と数えると、間は9つあって、何かが10個円状に並ぶと、間は10となる。いつも絵に書いて確かめていた。
- 物語の中で、「しばらく」ということばが出てきて、どのくらいの時間なのか気になったことがある。
- 「それは」や「いつものように」と書いてあると、何のことを指しているのか、何度も読み返していた。
- 0とは、「無」と習ったような気がするが、中学校に入ると、0以下がいきなり出てきた。無いものを足したり、引いたり、掛けたり、割ったりすることが不思議だった。操作に没頭した気がする。
- ろうそくに火をつけて、時間と燃えたらうそくの長さの関係は、 $+$ と $+$ だけれど、同じ問題で、時間とろうそくの残りの長さの関係は、 $+$ と $-$ 。 $+$ と $+$ の世界を主と考える感覚があった。
- 物理の滑車の問題で、次々に滑車の数を増やしていくのを目の当たりにして、非現実的だと感じて萎えてしまった。

「授業づくりを進めるわたしたちは、こうした苦手意識を持つようになった「理由」が気になります。

苦手の「きっかけ」は何だろう！

5月19日号、21日号でふれたように、学習の基盤は「数」を含む「言葉」であり、正しく伝えるためのことばと、そのことばを正しく理解すること、正しく伝えるための数と、その数を正しく理解すること、その積み重ねに、おもしろさ、価値を実感していくことが重要なだとあらためて思います。

わたしたちはそれぞれの持ち場で考え続けています。